

生成文法理論に基づく叙述的所有表現の一考察： 普遍的特性で規定されている部分と経験により獲得される部分*

松 藤 薫 子

日本獣医生命科学大学 英語学教室

要 約 本研究では、松藤（2012）で明らかにした英語と日本語の叙述的所有表現にみられる共通点と相違点を踏まえ、生成文法理論に基づき、叙述的所有表現のどの部分が普遍文法で規定される特徴であるのか、どの部分が言語経験を通して獲得される個別言語に特有な特徴であるのかを考察した。その結果、以下の4点を明らかにした。

第1に、所有者を表す名詞句が先、所有物を表す名詞句が後という順序がみられる。普遍文法に基本的語順を決定するパラメータがあると提案されている。子どもは早期に自分の母語の言語経験によりパラメータ値を固定し、所有者・所有物を含む文にも当てはめる。

第2に、英語、日本語などそれぞれの言語が持つ叙述的所有表現の形式に関して言語間変異がみられる。その変異を説明するために、少なくとも2つのアプローチがある。1つは、普遍文法にその変異を捉える2種類のパラメータがある。その1つが、出来事2つを2つの節で表す文に関わるものであるため、子どもは比較的遅い時期に言語経験に基づきパラメータ値を固定する。もう1つのアプローチは、普遍文法に、ある獲得段階から次の獲得段階の文法への移行をとらえる一般法則があり、その最終結果として生じる文法が言語間変異と考えるものである。

第3に、所有を表す動詞の項構造は、子どもが言語資料に接しながら、個々の動詞の語彙情報を獲得し、生得的な連結規則を用いて、項と文の統語構造を結びつける。所有文の意味は、生得的な言語獲得原理・意味の合成の原則と文化・経験を通して獲得する。

第4に、叙述的所有表現に表れる名詞は格や後置詞を取る。普遍文法に格認可システムがあると仮定されている。格を具現しない英語を獲得する子どもとは異なり、日本語児は、格標識を表す語や後置詞に属する語を学習しなければならない。

キーワード：叙述的所有表現、生成文法理論、言語獲得研究

日獣生大研報 63, 58-66, 2014.

1. は じ め に

人間がいかにして言語が使えるようになるのかに関して、少なくとも2つの考え方がある。1つは、古典的な「学習モデル」としての後天説である。赤ちゃんは保護者から受ける刺激に反応して発話するようになると考えられている。もう1つは、「獲得モデル」としての生得説である。言語は、赤ちゃんの発達過程で、生得的に備っている普遍文法と言語獲得原理が、言語経験と相互作用して獲得されるものと考えられている。この生得説を主張したのが、生成文法理論を展開しているノーム・チョムスキー（1965, 1975, 1981, 1986, 1995, 2001）である。普遍文法とは、人間に遺伝的に与えられた、獲得可能な文法の類を規定した生得的制約であり、その中に、言語の異なり方（言語間変異）に対する規定が含まれているとされている。これま

での仮説では、普遍文法は、言語獲得の最終産物である大人の文法により規定され、言語間変異は、パラメータにより捉えられ、パラメータは、普遍文法を構成する有限個の原理に含まれている、または、レキシコンで決定される機能範疇に属す解釈不可能な素性にあるとされてきた。言語獲得は、言語経験に基づき、パラメータの値が固定されることとみなされている。生成文法理論の精神に従っているが、普遍文法をチョムスキーのように静的な大人の文法だけで規定するより動的過程として規定するほうが妥当であるとする動的文法理論がある。梶田（1977, 1997）により展開されているこの理論では、普遍文法は獲得過程の中間段階の文法の特徴に基づいて規定され、言語間変異は、獲得過程のある段階から次の段階へ移行する過程をとらえる一般法則の帰結として得られると主張されている。本研究では生成文法理論を理論的枠組みとする（普遍文法の内部

構成の規定の仕方に上述のように少なくとも2つの仮説があるが、どちらが妥当かは理論的・実証的に検討する課題である)。

生成文法理論では、図1のような言語獲得モデルを仮定している。図1の入力と出力を比べると両者の間に質的な隔たりがある(出力の文法のほうが、言語に固有で抽象的で普遍的な性質を持つ)。この場合、刺激の貧困の状態があるという。図1は、刺激の貧困があるにもかかわらず言語獲得が可能なのはなぜかという問題を解くために提案されたものである。

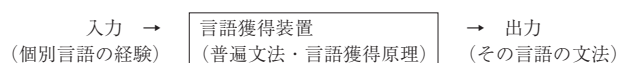


図1. 言語獲得モデル

言語獲得は、個別言語の経験と言語獲得装置の相互作用によって達成される。言語獲得装置には、獲得可能な文法の類を規定した普遍文法と、経験と普遍文法の相互作用のあり方を規定した言語獲得原理が含まれる。普遍文法は、一つとは限らずいくつかの仮説が提案され進展してきた。例えば、原理とパラメータのアプローチ(Chomsky 1981)では、言語獲得の過程を考慮して述べると、普遍文法には獲得の最初期から働く原理、成熟した後発現するため途中から働くように見える原理、ある原理にパラメータが付随しており、それが固定された後に機能するため途中から働くように見える原理がある。言語獲得原理には、普遍的な獲得原理と獲得過程のある段階の個別言語の文法の情報に言及する獲得原理がある。例えば、前者には意味による立ち上げ(Semantic Bootstrapping)がある(Pinker 1984)。これは獲得した語の統語範疇を決定する仕組みである。普遍文法には統語範疇のリストがあるが、子どもの個別言語獲得中の個々の語がどの範疇に属するのかが定められていない。そのため意味による立ち上げが発動されて、最初期の段階に、「物を表す語は名詞である」というように、統語範疇が獲得されるというものである。後者には、分布に基づく統語範疇の決定がある。これは獲得過程のある段階において意味による立ち上げが抑制・停止された後、「限定詞と共起する語は名詞である」というような分布に基づく統語範疇の決定が活性されるというものである。

以下2節では、本研究で焦点をあてる叙述的所有表現の諸特徴を整理する。

2. 先行研究：松藤(2012)

松藤(2012)では、人間が譲渡可能な物体を自分のものとして永続的に持つという意味を、文という形で表す叙述的所有表現に焦点をあてた。類型論研究Stassen(2009)は、話題である所有者人間が、修飾語のない不定の譲渡可能な所有物を永続的に支配するという肯定的な意味を表す文(*Taro has a car* など)を研究対象にした。その研究成果を概観し、この枠組みに基づき英語と日本語の所有叙述

表現を分析・考察した。そこで明らかにしたことの中から、語順、言語間変異、動詞の項構造、名詞がとる格・後置詞という4つの言語現象に注目し以下、整理する。

語順に関しては、英語も日本語も、文中に生起する所有者表現と所有物表現の順序は、前者が先、後者が後である。言語間変異に関しては、Stassen(2009)による類型論的分類では、永続的譲渡可能所有の意味を、英語はHAVE構文(*have* 動詞を用いた他動詞構文)で、日本語はLOC構文(場所を表す自動詞構文)、TOP構文(話題を表す自動詞構文)で表す。動詞の項構造に関しては、*have* 「いる／ある」「持っている」のどの動詞も、項の数は2つ、主題役割は、所有者と所有物である。所有物は名詞に属し、それが自律名詞か相対名詞か、および形・重量・価値により、永続的所有物のなりやすさに影響をあたえる。名詞がとる格(主格・目的格)・後置詞に関しては、英語では、主語に主格、目的語に目的格が付与されるが、格標識は具現されない。日本語では、格標識が具現され、一般に、主格標識「が」、目的格標識「を」がみられる。「(所有者)に(所有物)がある」の場合、「に」が主格標識か与格標識か後置詞かは明らかではない。

以下3節では、上記4点に関して、生成文法理論に基づき、何が普遍的で、何が個別的呢かを考察する。

3. 考 察

3.1 語順

文は、単なる単語の集合体だけではなく、「誰が誰に何をした」などを伝達する文法情報も含む。この情報の伝達を、英語では語順に頼るが、日本語では基本的な語順に形態構造(主格標識「が」、目的格標識「を」など)を使って伝える。(1)(2)はそれぞれ英語、日本語のa. 基本語順、b. 叙述的所有表現の内部構造、c. その具体例文を示している。

- (1) a. SVO
b. NP [所有者] has NP [所有物]
c. Taro has a car.
- (2) a. SOV
b. NP [所有者] に／には／は NP [所有物] がある。
b'. NP [所有者] は NP [所有物] を持っている。
c. 太郎に／には／は車がある。
c'. 太郎は車を持っている。

英語(1)より日本語(2)の方が複雑である。一般に、英語は比較的厳密に語順が決められているが、日本語では自由な語順が許されている。しかし、(2b)(2c)に関しては、かき混ぜ(scrambling)操作によって産出される文「??車が太郎にある」は文法性が下がると言われている(Tsujioaka 2002: 36)。また、(2b)の所有物には、修飾語句がある方が容認度が高い場合(太郎には外車がある vs. 太郎には車がある、私にはペンがたぐさんある vs. 私にはペンがある)がある。(2b')の所有物では文脈における独立性がある方が自然さを増し、限定性の高い修飾句を伴う

場合(彼は大きな家を持っている vs. 彼は家を持っている)がある(澤田 2003)。Stassen (2009) では、所有物を修飾語のない不定の譲渡可能な所有物と限定しているため、日本語によって表される叙述的所有表現を (2b) のみとしている。しかし、庵, 他 (2012: 36-37) は、所有物の内容と叙述的所有表現の形式をそれぞれ5つに分類した。所有物は、「人」、「才能など」、「熱など」、「目など」、「それ以外」に分け、本研究で扱う所有物は、「それ以外」に属す。その所有物が表される最も典型的な形は「人は～を持っている」、使われる形としては「人には～がある」があるとし、「人には～がいる」「人は～がある」「人は～をしている」は使えないとしている。本研究では、叙述的所有表現として (2b) (2b') 両方が可能であるとする。

生成文法理論に基づく枠組みで、語順や所有者・所有物の順序がどのようにして決定されるのかを検討する。言語の基本的な語順の決定は、パラメータによる。普遍文法の生得的な知識に、X バー理論、(例えば、動詞) 句は(動詞の) 主要部と(名詞の) 補部を含んでおり、主要部が先か、後かの主要部・補部パラメータ (complement-head parameter) があると仮定されている。これまでなぜそのようにパラメータ化されるのか明らかにされてこなかった。Chomsky (1995 以降) の普遍文法の縮小を目指すミニマリストプログラムの枠組みにおいて Kitahara (2013) は、主要部・補部のパラメータを、普遍文法の外にあるレキシコンの機能範疇に属す語彙項目の形態的素性が独立するか(英語)、依存するか(日本語)という言語間変異に還元できるとする提案をしている。

ある個別言語の子どもが、ある段階で、自分が獲得する言語経験に従って、そのパラメータの値を固定すれば、英語児であれば、VO (動詞、目的語の順)、日本語児であれば OV (目的語、動詞の順) を獲得する。所有者・所有物の順序は、英語は、基本語順に従うことで決定できる。日本語では、子どもが、基本語順と情報構造の知識を使うことにより、所有者が話題であり、所有者より所有物の方が動詞に密接な関係があることが認識でき、所有物と動詞を結合 (merge) させ、その後、この2つの塊と所有者を結合させることができれば、所有者が先で所有物が後の順序が現れると考えられる。

言語獲得の観点からは、基本的な語順の間違いはほとんどみられないことが知られている (Radford 1990, Wexler 1998, Sugisaki 2005 など)。叙述的所有表現の獲得過程で、所有者・所有物・所有動詞の3つの要素の中で2つ以上の要素が、いつ、どのような順序で使われるのか、また、前述の点に関して、所有動詞の2つのタイプ、動作を表す所有動詞 (*get* 「取る」) と状態を表す所有動詞 (*have* 「ある」「持っている」) で違いはみられるだろうか。語順とかき混ぜに関わる間違い (子どもが「私にお金がある」を「お金が私にある」と発話する、その2つの文を同じ意味の文として理解するなど) が観察されるのかを調査する必要がある。

3.2 言語間変異：叙述的所有表現形式のタイプ

生成文法理論では、言語間変異を捉えるのに、パラメータ (Chomsky 1981) と各獲得段階の文法の背後にある法則の帰結 (Kajita 1977, 1997) がある。パラメータに関しては、ある現象だけを導くパラメータが少しでも増えると、パラメータの値が2個だとしても子どもの心的計算量や短期記憶に対する負担が増大し言語獲得が困難になる。しかし、わずかな経験で値を定めることができ、できるだけ関係のない複数の現象を捉え、かつ相関のあるパラメータの数が多ければ多いほど言語獲得が容易になるようなパラメータは妥当なものだと考えられている (Baker M.C. 2001)。

Stassen (2009) は、*Taro has a car* に見られるような、話題である所有者人間が、修飾語のない不定の譲渡可能な所有物を永続的に支配するという意味を表す叙述的表現を対象とし、420 もの言語を形態統語論的に分析し、言語間変異として4つの類型、LOC 構文(場所を表す自動詞構文)、WITH 構文 (*with* を用いた自動詞構文)、TOP 構文 (話題を表す自動詞構文)、HAVE 構文 (*have* 動詞を用いた他動詞構文) の存在を確認した。図2のように、その変異を説明するのに、異なった2つのパラメータ (the balancing / deranking parameter, split / share parameter) を提案した。

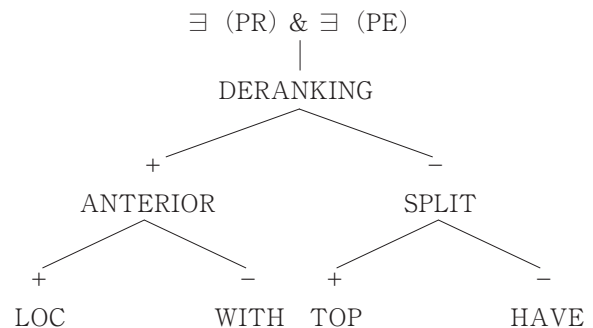


図2. The flow chart of predicative possession encoding (Stassen 2009: 723)

叙述的所有表現の意味を表す基底構造 (underlying structure) がヨ (PR) & ヨ (PE) として表されている。PR は possessor の省略形で所有者を表し、PE は possessee の省略形で所有物を表す。その基底構造は、「所有者が存在する」という出来事と「所有物が存在する」という出来事の2つがあり、その2つが同時に同じ場所にあることを示している。

deranking とは、節2つにそれぞれ使われている動詞に関して、一方の動詞の形がもう一方の動詞の形と異なっていること、または、従属節の中の動詞の形が主節の動詞の形と異なっていることをいう。balancing とは、ある節ともう一つの節にある動詞の形、または、従属節と主節の動詞の形が同じことをいう。

deranking 言語では、どちらの節の動詞を下降させて

叙述的所有表現を生成させるのかということにより二分される。つまり deranking 言語には最初の節の動詞を下降させる言語（前方動詞下降言語：anterior deranking languages）と 2 番目の節の動詞を下降させる言語（後方動詞下降言語：posterior deranking languages）がある。deranking の操作が前方、後方のどちらに適用されるかは、語順によって予測可能であることが (3) のような普遍的傾向として規定される。前方動詞下降言語では、LOC 構文が主に使われ、語順が SOV である。後方動詞下降言語では、WITH 構文が主に使われ、SVO または VSO である。

(3) TENDENCIES IN THE DIRECTIONALITY OF DERANKING

- a. Languages with anterior deranking tend to have verb-final word order (SOV)
- b. Languages with posterior deranking tend to have verb-medial or verb-initial word order (SVO / VSO)

(Stassen 1985: 88-90, Stassen 2009: 709 (10))

split / share パラメータに関しては、自動詞を使った叙述関係を表す構文に、場所を表す叙述構文と部類・階級・職業などの class-membership を表す名詞で表す叙述構文があり、自動詞の表し方に言語間変異があることを Stassen (1997) は確認した。2つの構文に使われている自動詞が同じであるものが share 言語と呼ばれ、2つの構文に使われている自動詞が異なるものが split 言語と呼ばれる。

英語は、(4) – (6) が示すように balance 言語, share 言語, HAVE 構文という特徴がある。

- (4) a. John was late and Mary was worried.
b. When John was late, Mary was worried.
(Stassen 2009: 255 (3))
- (5) a. Fans is a linguist.
b. Masha is in Stockholm. (Stassen 2009: 573 (41))
- (6) John has a motorcycle. (Stassen 2009: 573 (39))

(4) のように最初の節と次の節の動詞の形 *was* が共通である (balance 言語)。(5) のように職業を表す叙述構文と場所を表す叙述構文で使われている自動詞が同じ *is* である (share 言語)。(6) のように叙述的所有表現には HAVE 動詞が使われる (HAVE 構文)。

日本語には、叙述的所有構文に主要タイプと副次タイプがある。主要タイプは、(7) (8) が示すように deranking, anteria 言語, LOC 構文という特徴がある。

- (7) a. 太郎がアメリカに行き、花子がフランスに行った。
(Kuno 1978: 124, Stassen 2009: 306 (110a))
b. ジョンはピアノが上手で、メアリはギターが上手だ。
(Hinds 1986: 85, Stassen 2009: 306 (110b))
- (8) 太郎に車がある。

(7) のように最初の節の動詞が、(7a) では「行く」、(7b) では形容動詞「上手」が下降している。前節の動詞に、動詞由来述語で副詞的情報を与える coverb が付与さ

れている (例:「行き」が *ik-i*, *go-coverb* と分析) (anteria deranking 言語)。(8) のように叙述的所有表現に場所を表す自動詞構文が使われる (LOC 構文)。

日本語の副次タイプは、(9) – (11) が示すように balance 言語, split 言語, TOP 構文という特徴がある。

- (9) a. まりこは東京へ行きますが、じゅんこは神戸へ行きます。
(Hinds 1986: 89, Stassen 2009: 434 (5a))
b. 太郎がアメリカに行ったし、花子がフランスへ行った。
(Kuno 1978: 121, Stassen 2009: 435 (5b))
- (10) a. ジョンはうそつきだ。

- b. 机の上に本がある。
(Makino 1968: 1, Stassen 2009: 437 (9b))

- (11) あの人は金がたくさんある。
(Plaut 1904: 259, Stassen 2009: 433 (3b))

(9) のように最初の節と次の節の動詞の形が (9a) では「行きます」(9b) では「行った」になり、それぞれ同じ形態の動詞が使われている (balance 言語)。(10) のように部類を表す叙述構文と場所を表す叙述構文で使われている自動詞が「だ」と「ある」で異なる (split 言語)。(11) のように叙述的所有表現には話題を表す自動詞構文が使われる (TOP 構文)。

上記のパラメータの理論では、言語の多様性として表れる可能な言語のタイプが 4 つあること、タイプの相対的頻度が同程度であること (LOC が 129 言語, WITH が 113 言語, TOP が 135 言語, HAVE が 134 言語) が説明できる。また、複数のパラメータが系統的に並び、複数の現象を捉えている。言語獲得の観点からは、いつ、どのようにそのパラメータが固定されるかを精査する必要がある。

言語間変異を捉えるもう一つの方法は、動的文法理論の法則 (12) によるものである。(12) の記述にある規則とは、言語の特徴をとらえる一般化とみなされる。

- (12) a. X という種類の規則は、任意の言語の任意の習得過程で可能である。

- b. もしある言語 *j* の習得段階 *i* の文法 G_j^i のなかに、Y という種類の規則が含まれているならば、同言語の次の習得段階 *i* + 1 の文法 G_j^{i+1} においては、Z という種類の規則が可能である。(Kajita 1983: 4)

この法則によって得られる規則は、ある個別言語のある獲得段階以降になってはじめて、その言語で可能となる規則である。その規則の最終結果に言語間変異が生じるとされる。

(12b) の法則により、ある規則と別の規則の間に基本・派生の関係を捉えている。例えば、池上 (2006)、畠山 (2009) は、「いる／ある」の存在文と所有文を基本と派生で捉える。畠山 (2009: 107) は、基本タイプを存在文「公園に子どもがいる」、派生タイプを所有文「私に子どもがいる」とする。存在文は「ある／いる」タイプの動詞（「存在する」等）が持つ基本的な用法を表している。所有文は、存在文の場所を表す「に」のついた名詞句に対して所有者を表すものに置き換えることによって作られる派生的

な構文（基本的な文をもとにして拡張的に作り出された文）と考えることができると指摘する。獲得過程で、「存在の意味とその表現形」が基本となり、その後、派生として「所有の意味とその表現形」が獲得されるという可能性はある。Matsuoka (2001) は、子どもの概念化の過程で、発生範疇 [PLACE] が基本となり、その後派生として [POSSESSOR] が獲得されると指摘する（他の例として Clark and Carpenter 1989: 発生範疇 [SOURCE] その後の派生範疇 [AGNET] [CAUSE]）。普遍文法に典型・派生という概念を組み入れた方が言語事実を適切に説明できるのかに関して検討する必要がある。

3.3 動詞の項構造

3.3.1 動詞の項と文構造への投射

動詞の項構造は、語彙的情報の 1 つで、動詞が必要とする項の数と、各項が担う主題役割に関する情報が含まれる。項が統語構造でどの位置（主語や目的語など）を占め、どのような統語範疇に対応するかを規定する連結規則 (linking rule) が存在すると考えられている。*get* は、動作を表す所有動詞に属し、(13a) のような文で使われる。(13b) のように *get* は、2 つの項、動作主と主題からなる。(13c) は、ある動詞が動作主と主題を取るのであれば、動作主を主語に、主題を目的語に連結せよという連結規則に従って示したものである。

- (13) a. I get a ball.
 b. get NP [動作主] ____ NP [主題]
 c. get (____, ____) → get (SUBJ, OBJ)
 agent theme

(14a) は本研究で焦点をあてている状態を表す所有動詞 *have* が使われている文である。(14b) は、*have* が 2 項、所有者と所有物を取る動詞であることを示している。「所有者」とは、典型的には、譲渡可能な物を管理・支配し、比較的永続的に同じ場所で所有する人間のこととする (Stassen 2009, Taylor 1996)。(14c) は、*have* が所有者と所有物を取るのであれば、所有者を主語に、所有物を目的語に連結せよという規則に従って示したものである。

- (14) a. I have a car.
 b. have: NP [所有者] ____ NP [所有物]
 c. have (____, ____) → have (SUBJ, OBJ)
 possessor possessed

動詞の項構造の獲得の問題を扱うとは、動詞の意味特性が文の構造に投射されるという知識を子どもがどのようにして獲得するのかを明らかにすることである。子どもは言語資料に接しながら個々の動詞の語彙情報を獲得し、(15) のような生得的な連結規則によって、それを統語構造に結び付ける。

- (15) Subject Agent of action; cause of causal event;
 subject of an attribution of location,
 state, or circumstance; argument with
 "autonomous reference"

- Object Patient or theme
 Oblique Source, goal, location, instrument

(Pinker 1984: 41)

(13) (14) (15) から、動作を表す所有動詞 *get* の方が状態を表す所有動詞 *have* より語彙的情報と連結規則において典型的であると推測される。*get* では (13b) のようにその項が動作主と主題であり、(15) により統語構造に結び付けることができる。*have* では (14b) のようにその項が所有者と所有物であり、(15) の中に、所有者、所有物という意味要素が存在しなく、所有者は subject of an attribution of state, 所有物は theme に近いが、同じ要素ではない。

日本語では、(16) のように、動詞の原形は「持つ」であるが、「持つ」より「持っている」の方が使用頻度が高い。(16) は、英語の *have* と同様の特徴がある。

- (16) a. 私は外車を持っている。
 b. 持っている: NP [所有者] ____ NP [所有物]
 c. 持っている (____, ____) → 持っている
 possessor possessed
 (SUBJ, OBJ)

(17) のように所有動詞「ある」は (17a) のような文で使われる。(17b) のように「ある」は 2 項、所有者と所有物を取る。(17c) のようにその 2 項がどの位置に投射されるかは少なくとも 2 つの可能性がある。一方が「持っている」と同様に他動詞、他方が (18) でみる存在動詞と同様に自動詞の特徴を示すものである。

- (17) a. 私には外車がある。私に外車がある。私は外車がある。
 b. ある: NP [所有者] には / に / は NP [所有物] が ____
 c. ある (____, ____) → ある (SUBJ, OBJ)
 possessor possessed

または、ある (OBL / DAT / TOP, SUBJ)

「ある」は所有動詞でもあり (18) のように存在動詞でもある。存在動詞「ある」は (18a) のような文で使われ、(18b) のように「ある」は 2 項、場所と主題を取る。「場所」とは、人間が関わる空間で、何かが行われたり存在したりする所とする (丸田 2008, 岡 2013)。(18c) のように場所は斜格の位置、主題は主語の位置を占める。

- (18) a. 公園に外車がある。公園には外車がある。
 b. ある: NP [場所] に NP [主題] が ____
 c. ある (____, ____) → ある (OBL, SUBJ)
 location theme

獲得過程において、子どもは、*have*、「ある」、「持っている」の項が所有者・所有物であることをすぐに獲得できないと言われている。Tomasello (1992) は、英語児は *have* を状態を表す動詞でなく、動作を表す所有動詞 (*get*) のように扱っていると指摘する (Ambridge and Lieven 2011)。*get* と *have*、「取る」と「持っている」に関して a) 主語と目的語に現れる名詞はそれぞれどのような意味を表

すのか、b) 2つの動詞を同じように使っている時期があるか、c) 相違がみられる時期はいつ頃からか、d) 大人と同じように用法や意味が使えるようになるのはいつ頃かを考察する必要がある。

3.3.2 動詞の項となる名詞の意味と文の意味

所有動詞の項となる名詞の意味は、所有者として人、所有物として物である。所有物の物はどんな物でもよいが、その物が自律名詞か、相対名詞か、その物の形、重量、価値により、その文全体の意味に影響を与える(松藤2012)。

名詞の意味の獲得は、音声形と意味との結びつきに関して、子どもに手がかりを与えるものとして機能する生得的な言語獲得の原理がある。例えば、事物全体制約(whole object assumption)、分類制約(taxonomic assumption)、相互排他性制約(mutual exclusivity assumption)がまず働き、その後どこかの段階で利用ができなくなる(Markman 1989)。それから、所有物を表す名詞と所有動詞を結びつけるとき、意味の合成の原則(The principle of semantic compositionality)を踏まえ、子どもは文化慣習や叙述的所有表現などの言語経験により、一時的な所有を表す文や永続的な所有を表す文を学習する。

3.4 名詞がとる格(主格・目的格)・後置詞

Chomsky (1995)では、格認可システムは、生得的な普遍文法の一部であると仮定されている。英語では、(19)のIに主格、a carに目的格が付与される。

(19) I have a car.

日本語では、(20a)の「が」は主格標識、「を」が目的格標識である。(20a')では、主語が話題化されて「太郎が」が「太郎は」になる。(20a)より(20a')の方が使用頻度が高い。

(20) a. 太郎が外車を持っている。

a'. 太郎は外車を持っている。

b. 太郎に外車がある。

b'. 太郎には外車がある。

b". 太郎は外車がある。

(20b') (20b")の「は」は(20a')と同様、話題化された結果である。(20b)の「に」に関しては少なくとも(21)のような3つの分析案がある。(21)のhead 主要部、comp 補部、spec 指定部、adjunct 付加部は、階層を持つ統語構造の位置を表す。

(21) a. 太郎に 外車が ある

NOM OBJ V

spec comp head

b. 太郎に 外車が ある

DAT NOM V

spec comp head

c. 太郎に 外車が ある

postp NOM V

adjunct comp head

(21a)は他動詞構文であり、「に」が主格標識、「が」が目的格標識を表す。その根拠として例えば、竹沢(2003)は、(22a)は(22b) (22b')の2項を取る状態述語構文(他動詞構文)と同じ格交替を示し、(22c)の存在文ではその交替が不可能であると指摘する。

(22) a. 太郎に／が貯金がある(こと)

b. 太郎に／がお金がかかる(こと)

b'. 太郎に／が英語がわかる／できる(こと)

c. 机の上に／*がお金がたくさんある(こと)

岸本(2005)は、主語テスト(再帰代名詞・コントロール PRO・随意解釈の PRO)により、「に」格名詞句が主語、「いっぱい」を使った内項テストにより「が」格が目的語であることを確認した。例えば、再帰代名詞「自分」は一般に主語指向性がある。

(23) a. 自分の部屋に政夫がいた。(存在文)

b. *自分のいとこに弟がいない。(所有文)

c. 健には自分で使えるお金がない。

(影山編 2011: 263)

(23a)では、「自分」が「政夫」を指し、「政夫が」が主語である。これに対し、(23b)では、「自分」は「弟」を指すことができないため、「弟が」は主語ではない。(23c)では、「自分」は「健」を指すことができるため、叙述的所有表現の主語は二格名詞句であることになる。

(24) 私のいそこには兄弟がいっぱいいる。

(岸本 2005: 171)

(24)では、「いっぱい」が「兄弟」の数を指定し、たくさんの兄弟という意味になる。「いっぱい」は「私のいそこ」の数量を指定することはない。「兄弟」が内項として働き、目的語の位置に表れていることになる。

(21b)の「太郎に外車がある」は、「に」が与格標識、「が」が主格標識を含む存在文の一種であり、特定の所有者と主題を表したものである。これはハンガリー語の叙述的所有表現と並行的な構造と分析する案である(Tsujioaka 2002)。(25a) (26a)の限定詞句から所有者を抽出(移動)して(25b) (26b)の叙述的所有表現が派生するものである。

(25) ハンガリー語

a. Mari-nak a kalap-ja-i

Mary-DAT the hat-POSS.3SG-PL

'Mary's hats'

b. Mari-nak van-nak kalap-ja-i

Mary-DAT be-3PL hat-POSS.3SG-PL (-NOM)

(Szabolcsi 1994: 223, 180) (Tsujioaka 2002: 24)

(26) 日本語

a. John no boosi

John GEN hat

b. John ni boosi ga ar-u

John DAT hat NOM be-PRES

(Tsujioaka 2002: 30-31)

(21c)の「太郎に外車がある」は、「に」が後置詞、「が」

が主格標識を含む自動詞構文である。存在文と所有文が同じ構造を示し、二格名詞句は場所表現から所有者表現に再分析されたものである。

(27) a. 公園に車がある (場所)

b. 私に (は) 車がある (所有者)

言語獲得の観点からの問題は、1 つに、一部分が同じと分析される表現の獲得のされ方である。(21a)と同じ構造・同じ意味であるが違った表現(「太郎に外車がある」「太郎が外車を持っている」)、(21b)に使われている与格「に」と「私は太郎にお菓子をあげた」に使われている与格「に」、構造が同じ(27a)と(27b)を子どもはどのように獲得するのだろうか。

2 つめに、後置詞の獲得に関するものである。後置詞は、普遍文法では規定されない。「に」と結びつく意味は多義である(Clancy 1985: 多義として状態 *stative*, 方向/場所 *directional / locative*, 与格 *datives*, 受動文の動作主 *agents in passive*, 使役文の動作主 *agents in causative sentences*, 副詞相当句 *adverbials*, 所有 *possessive*)。それに対して「公園へ行く」に使われる「へ」は一義で、場所への方向を意味する。Slobin (1973, 1985) は子どもは形と意味の結びつきにおいて、1 対 1 の結びつきを好むという仮説を提案している。これに従うと、子どもは、「に」より「へ」を好んで使い始めると予測される。「に」は複数の意味と結びつくが、どのように所有の意味を獲得するのであろうか。経験に基づき「に」とその意味の一つずつを学習していくのであれば、「に」が所有を示すものと結びつくまで、相当な時間がかかると推測される。

4. お わ り に

本研究では、松藤 (2012) で明らかにした英語と日本語の叙述的所有表現にみられる共通点と相違点を踏まえ、生成文法理論に基づき、叙述的所有表現のどの部分が普遍文法で規定される特徴であるのか、どの部分が言語経験を通して獲得される、個別言語に特有な特徴であるのかを考察した。その結果、以下の 4 点を明らかにした。

第 1 に、所有者を表す名詞句が先、所有物を表す名詞句が後という順序がみられる。普遍文法に基本的語順を決定するパラメータがあると提案されている。子どもは早期に自分の母語の言語経験によりパラメータ値を固定し、所有者・所有物を含む文にも当てはめる。

第 2 に、英語、日本語などそれぞれの言語が持つ叙述的所有表現の形式に関して言語間変異がみられる。その変異を説明するために、少なくとも 2 つのアプローチがある。1 つは、普遍文法にその変異を捉える 2 種類のパラメータがある。その 1 つが、出来事 2 つを 2 つの節で表す文に関わるものであるため、子どもは比較的遅い時期に言語経験に基づきパラメータ値を固定する。もう 1 つのアプローチは、普遍文法に、ある獲得段階から次の獲得段階の文法への移行をとらえる一般法則があり、その最終結果として生じる文法が言語間変異と考えるものである。

第 3 に、所有を表す動詞の項構造は、子どもが言語資料に接しながら、個々の動詞の語彙情報を獲得し、生得的な連結規則を用いて、項と文の統語構造を結びつける。所有文の意味は、生得的な言語獲得原理・意味の合成の原則と文化・経験を通して獲得する。

第 4 に、叙述的所有表現に表れる名詞は格や後置詞を取る。普遍文法に格認可システムがあると仮定されている。格を具現しない英語を獲得する子どもとは異なり、日本語児は、格標識を表す語や後置詞に属する語を学習しなければならない。

以上から、状態を表す叙述的所有表現の方が動作を表す叙述的所有表現より獲得が遅い、日本語の叙述的所有表現の方が英語の叙述的所有表現より獲得が遅いと推測される。言語獲得から得られる資料が、ある分析案の妥当性に対して証拠になる可能性があり、また、普遍文法の内部構造に基本・派生の概念を組み入れた方が妥当かどうかを検証する資料になる。上述の推測や可能性を検討するために、今後、叙述的所有表現の獲得解明へ向けて基礎的研究を行う。

* 本研究は平成 25 - 29 年度日本学術振興会科学研究費(基盤研究 (C) 課題番号 25370561 研究者代表 松藤薫子)の助成を受けた研究成果の一部である。

引 用 文 献

- AMBRIDGE, B. and E.V.M. LIEVEN (2011). *Child Language Acquisition*. Cambridge University Press.
- BAKER, M.C. (2001). *The Atoms of Language*. Basic Books.
- CHOMSKY, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT Press.
- CHOMSKY, N. (1975). *Reflections on Language*. Pantheon Books.
- CHOMSKY, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- CHOMSKY, N. (1986). *Knowledge of Language*. Praeger.
- CHOMSKY, N. (1995). *The Minimalist Program*. The MIT Press.
- CHOMSKY, N. (2001). Derivation by Phrase. In Kenstowicz M. (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, MIT Press, 1-52.
- CLANCY, P.M. (1985). The Acquisition of Japanese. In Slobin D.I. (ed.) *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition Volume 1: The Data*. Lawrence Erlbaum Associates, 373-524.
- CLARK, E.V. and K.L. CARPENTER (1989). The Notion of Source in Language Acquisition. *Language* 65, 1, 1-30.
- 畠山雄二, 編 (2009). 『日本語の教科書』ベレ書房.
- HINDS, J. (1986). *Japanese*. Croom Helm.
- 池上嘉彦 (2006). 『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送

- 出版協会.
- 庵功雄, 他 (2012). 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーネットワーク.
- 影山太郎, 編 (2011). 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店.
- KAJITA, M. (1977). Towards a Dynamic Model of Syntax, *SEL* 5, 44-76.
- KAJITA, M. (1983). Grammatical Theory and Language Acquisition. Paper presented at the first General Meeting of the English Linguistic Society of Japan.
- KAJITA, M. (1997). Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language. In Ukaji, M., T. Nakao, M. Kajita, and S. Chiba (eds.), *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, Taishukan, 378-393.
- 岸本秀樹 (2005). 『統語構造と文法関係』くろしお出版.
- KITAHARA, H. (2013). Language Variation and Parameterization Revisited. 池内・郷路, 編『生成言語研究の現在』ひつじ書房, 13-39
- KUNO, S. (1978). Japanese. In Lehmann, W. P. (ed.), *Syntactic Typology*. Harvester Press, 57-138.
- MAKINO, S. (1968). Japanese "Be". In Verhaar, J. W. M. (ed.), *The Verb Be and Its Synonyms Part 2*, Reidel, 1-19.
- MARKMAN, E. (1989). *Categorization and Naming in Children*. MIT Press.
- 丸田一 (2008). 『「場所」論－ウェブのリアリズム, 地域のリアリズム』NTT出版.
- 松藤薫子 (2012). 「永続的所有を表す叙述表現に関する英語と日本語の比較: Stassen の類型論研究に基づいて」『日本獣医生命科学大学研究報告』61, 60-70.
- MATSUOKA, K. (2001). The Acquisition of the Japanese Particle *ni*. In Nakamura, M. (ed.) *Issues in East Asian Language Acquisition*, Kuroshio Publishers, 129-145.
- 岡智之 (2013). 『場所の言語学』ひつじ書房.
- PINKER, S. (1984). *Language Learnability and Language Development*. Harvard University Press.
- PLAUT, H. (1904). *Japanische Konversations-Grammatik mit Lesestücke und Gespräche*. Julius Groos.
- RADFORD, A. (1990). *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*. Blackwell.
- 澤田浩子 (2003). 「所有物の属性認識」『言語』vol.32・No.11, 54-60.
- SLOBIN, D.I. (1973). Cognitive Prerequisites for the Development of Grammar. In Ferguson, C.A. and D.I. Slobin (eds.), *Studies of Child Language Development*, Holt, Rinehart, and Winston, 175-209.
- SLOBIN, D.I. (1985). Crosslinguistic Evidence for the Language-Marking Capacity. In Slobin D.I. (ed.) *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition Volume 2: Theoretical Issues*, Lawrence Erlbaum Associates, 1157-1256.
- STASSEN, L. (1985). *Comparison and Universal Grammar*. Basil Blackwell.
- STASSEN, L. (2009). *Predicative Possession*. Oxford University Press.
- SUGISAKI, K. (2005). Early Acquisition of Basic Word Order: New Evidence from Japanese, *BUCLD* 29, 582-591.
- SZABOLCSI, A. (1994). The Noun Phrase. In Kiefer, F and K. E Kiss (eds.) *The Syntactic Structure of Hungarian. Syntax and Semantics* 27, Academic Press, 179-274.
- 竹沢幸一 (2003). 「「ある」と *have/be* の統語論」『言語』vol.32・No.11, 61-68.
- TAYLOR, J.R. (1996). *Possessive in English*. Oxford University Press.
- TOMASELLO, M. (1992). *First Verbs*. Cambridge University Press.
- TSUJIOKA, T. (2002). *The Syntax of Possession in Japanese*. Routledge.
- WEXLER, K. (1998). Very Early Parameter Setting and the Unique Checking Constraint, *Lingua* 106, 23-79.

A Note on Predicative Possession Analyzed by Generative Approaches

Shigeko MATSUFUJI

Laboratory of the English Language, Nippon Veterinary and Life Science University

Abstract

This study examines selected characteristics of predicative possessive expressions in English and Japanese. It employs the framework of generative grammar developed by Chomsky (1981, 1986, 1995) and Kajita (1977, 1997) and is influenced by Matsufuji's (2012) findings of differences and similarities between English and Japanese. It examines which features of predicative possessive expressions are constrained by universal grammar (UG) and which are acquired by linguistic experience.

The following results are obtained:

- i) In a sentence, the expression containing the possessor is ordered before that containing the possessee. UG is thought to contain a parameter that determines basic word order. During early stages of language development, children fix values for the parameter based on their mother tongue and apply the structure to sentences containing possessor and possessee noun phrases.
- ii) Cross-linguistic variation is observed in the construction of predicative possession. At least two approaches account for this variation. The first approach suggests that there are two different parameters in UG. One parameter is related to a sentence with two clauses expressing two events. Children understand and produce such sentences during later stages of language development and fix the parameter's values based on linguistic experience. The second approach characterizes possible next grammars on the basis of the properties of the present grammar in the process of language learning. It regards the evident variety observed in adult grammar as the result of the developmental process guided by constraints imposed in UG.
- iii) The structure of possessive verbs consists of two arguments: POSSESSOR and POSSESSEE. Children acquire lexical information about each verb by experiencing primary linguistic data. Then, they use innate linking rules to associate arguments with a syntactic structure of a sentence. A typical linking rule states if a verb takes an agent and a patient, associate the agent with the subject and the patient with the object. Possessive verbs are related to less typical argument structures and linking rules than active verbs. Children acquire the meaning of possessive sentences under the principles of semantic compositionality and innate language acquisition through experience and exposure to their culture.
- iv) Nouns in predicative possessive expressions take cases or postpositions. The case licensing system is assumed to be included among innate grammatical principles (UG, Chomsky, 1995), whereas postpositions are not necessarily governed by syntactic principles. English has no surface realization of case. Not English-speaking children but Japanese-speaking children must learn words expressing case markers or postpositions.

This study's findings imply that predicative static possessive expressions are acquired later than predicative active ones and that native speakers of Japanese acquire predicative static ones later than native speakers of English. Data from language acquisition can be a) empirical evidence to support the validity of a proposed analysis and b) data to discuss whether the concepts of basic and derivation should be incorporated into the internal structure of UG. To consider the study's implications, the entire acquisition process of predicative possessive expressions needs to be explored.

Key words : predicative possession, generative approaches, child language acquisition

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., **63**, 58-66, 2014.